

平和友好条約締結40周年を迎える 日中の民間交流

～中国人高校生のホームステイ留学から歌舞伎北京公演まで～

国際交流基金

吾郷 俊樹

S
P
O
T

1 はじめに

2016年7月 都内某ホテルにて、中国の高校生の長期受入事業の10周年記念レセプションが開催された。

2005年に反日デモが頻発。翌2006年から開始されたこの事業は、毎年、中国の高校生を日本に招き、約1年間、一般家庭にホームステイなどしながら、日本の高校で日本の生徒と高校生活を送るプログラムである。中国全土から中国の文部科学省に相当する教育部が選拔し、毎年、30人程度が北は北海道から南は沖縄まで、全国各地の高校に散らばっていく。

日中関係で何かがあると続かなくなることが多い中、このプログラム、日中関係が非常に厳しい時期でも継続して実施。10年経つと現役・修了生は300人を超える。10代で来日した彼らの将来は長い。あと50年経てば、OB、OG含めて2,000人近くになる。優秀な若者が、日本好きになって戻って、活躍し、その子供や孫も増えていくことになる。

なぜ、このようなプログラムを実施しているのか。1972年の田中角栄総理の日中国交回復交渉の際、当時、大使館も何もない北京でロジの実務を担当し、その後、外務省中国課長、アジア局長、中国大使を歴任し、現在、このプログラムを実施している国際交流基金日中交流センターの阿南惟茂所長は語る。

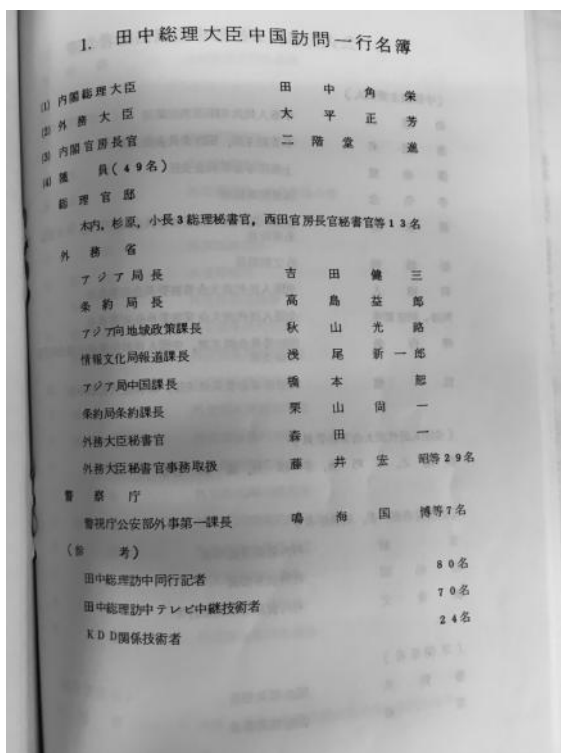
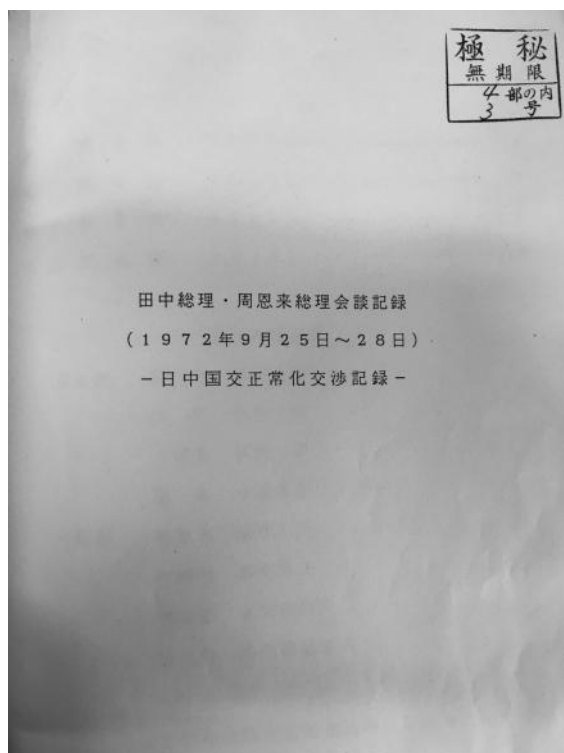
「今年は日中平和友好条約締結40周年。日本と中国は大事なパートナーであるにもかかわらず、日中関係は当時期待していた状況ではない。日中関係は80年代中頃は非常に良かった。そういう時代には、両国は思想、政治、経済、社会も違う。何もかにも違うから互いに尊重しないといけないというのが両国の政治指導者の決意だった。出発点が全く違う中で、全く違う割には仲良くできるじゃないかと、どこかに共通点を見出そうとしていた。その後、お互いに付き合いが深くなったがゆえに、互いに遠慮がなくなった。それは、将来に向かって、必ず通らなければならないプロセスとしてやむを得ない面もある。

日中関係は国交正常化以来、政府間の関係が非常に大きかった。その分、民間のパイプが細い。日米関係は、政府の関係はもちろん、それ以上に戦前から民間の日本人が現地に溶け込む努力をしてきており、民間の関係が日米関係ではしっかりしていた。日中関係ではそういった草の根の部分弱い。そこで、日中の民間同士の交流を深めることが重要。そのためにも、民間の、特に若い人たちに交流してもらうこと。我々が実施しているプログラムが日中の民間外交の一つのモデルになればよいと願っている。」

この年末にも1986年の中曽根総理の訪中など



10周年記念レセプションにて、左から第1期から第9期までの日本で企業や大学に通うOB・OGによる現況報告。



国交正常化交渉の際の田中総理・周恩来総理会談記録、田中総理大臣中国訪問団一行名簿。外務省外交史料館所蔵。

の外交文書の公開が話題になったところだが、ロシア大使館のお向かい辺り、外務省の飯倉公館の建物の一角に、秘密解除された明治以来の外交文書が閲覧できる「外交史料館」がある。飯倉公館に呼ばれる機会はなくとも、外交史料館には誰でも行ける。1972年9月の日中国交回復交渉関係の資料を見ると、田中総理・周恩来総理による4回の首脳会談の記録、並行して行われた3回の外相会談の記録、総理一行の名簿、日程表、総理と毛沢東主席との面談記録、各宴会での田中総理、周恩来総理の挨拶など興味深い資料が見られる。

それから半世紀近く、以下、最近の日中関係の民間の交流のいくつかの取り組みをご紹介します。

2 中国高校生長期招へいプログラム (心連心)

(1) プログラムの内容

このように首脳同士の交渉で回復した日中関係については、1983年の中曽根総理の訪中時の胡耀邦総書記との間の合意で、日中友好21世紀委

員会が発足。両国で交互に行われる会合の都度、双方の総理に報告することとなった。その後、2003年に小泉総理と胡錦濤国家主席との日中首脳会談で新日中友好21世紀委員会の設置が合意され、その第2回会合での青少年交流強化の提言を受け、2006年から日中21世紀交流事業が始まる。その柱がこの日中高校生の交流プログラムである。日本と中国の将来を担う若者たちが心と心を結び合うことを意味する「心連心」プログラムともいう。

2016年10周年を迎えたこのプログラムでは、中国の大都市出身の生徒が多い中で、日本では東京に行くのは一人位で、文字通り全国に行くので、当然、日本の大都会に行くと思っていた多くの生徒は面食らう。昨年無事帰国した11期生の中には、沖縄はもとより、初めて長崎県の壱岐高校という離島の高校に行った生徒もいる。彼らは一人っ子なので、家では家族の中心で、自分で電車の切符も買ったことがない子もあり、学校ではひたすら勉強だけをしてきた人たちだ。



離島の長崎県立杵岐高校でテニス部に入部。指導を受ける何祥龍くん

それまで家では勉強だけしていれば、親がすべて御膳立てしてくれていたのに慣れていて彼らが、ホームステイ先の日本の一般家庭に入ると、兄弟がいて、家のことを手伝わされたりするのに驚く。学校に行っても勉強しているだけではなく、部活動という受験には何の役にも立ちそうもないことに日本の生徒が一生懸命に取り組んでいるのに驚く。不思議に思いつつも、珍しいこともあり、いろんなことをやってみたくなる、一人でいくつもの部に入る生徒も多い。日本の高校だと普通にある体育祭や文化祭だって、中国にはないから新鮮だ。初めて、みんなで一緒にやるということを経験する。

彼らは、第一外国語として日本語を勉強してきた高校生。とはいっても、日本人の大人でもついていけない高校生同士の会話にいきなりついていけないわけでもないの、彼らも初めは相当悩む。しかし、お国でもよく勉強していたので、日本語による授業ということを除けば、日本の学校の勉強自体が大変だということはあまりなく、彼らの熱心な勉強振りは、日本の生徒たちにも良い刺激になる。特に、英語は通常、日本の生徒よりもはるかに上手いから、一目置かれるようになるという。受け入れ校にとっても他の生徒への教育効果というメリットがある。大学生らに交じり、地区予選を勝ち抜き、高校生で唯一、日本語弁論の全国大会に出場した生徒もいる。

受入校の中には、例えば、東京だと、大泉にある開校10年目の東京学芸大附属国際中等教育学校や、甲子園出場の強豪、福井県の敦賀気比高等



無事、研修を終えて帰国前日の帰国前報告会、阿南所長(中央)と留学生

心連心：中国高校生長期招へい事業 第11期生 受入先

1	とわの森三愛高等学校	北海道
2	立命館慶祥中学校・高等学校	北海道
3	盛岡中央高等学校	岩手県
4	明桜高等学校	秋田県
5	埼玉県立蕨高等学校	埼玉県
6	東京学芸大学附属国際中等教育学校	東京都
7	横須賀市立横須賀総合高等学校	神奈川県
8	敦賀気比高等学校	福井県
9	長野県長野西高等学校	長野県
10	静岡学園高等学校	静岡県
11	光ヶ丘女子高等学校	愛知県
12	桜丘高等学校	愛知県
13	三重高等学校	三重県
14	京都府立鳥羽高等学校	京都府
15	立命館宇治中学校・高等学校	京都府
16	大阪府立桜塚高等学校	大阪府
17	大阪府立夕陽丘高等学校	大阪府
18	清風南海中学校・高等学校	大阪府
19	奈良市立一条高等学校	奈良県
20	和歌山県立那賀高等学校	和歌山県
21	広島市立舟入高等学校	広島県
22	福岡市立福岡西陵高等学校	福岡県
23	龍谷高等学校	佐賀県
24	活水高等学校	長崎県
25	長崎県立杵岐高等学校	長崎県
26	岩田高等学校	大分県
27	日章学園高等学校	宮崎県
28	鹿児島県育英館高等学校	鹿児島県
29	鹿児島県立武岡台高等学校	鹿児島県
30	神村学園高等部	鹿児島県
31	沖縄県立向陽高等学校	沖縄県

学校がある。同校への留学生は、吹奏部員として野球部の甲子園出場の際にはアルプススタンドで演奏したという。

日本からの留学生全体が減る中、高校生で留学できる生徒は限られている。まして、中国への留学となると、今の快適な日本の生活に慣れている日本の生徒は二の足を踏む。中国からの留学生がいれば、日本に居ながらにして、日常的な付き合いができるのだから、きっと日本の生徒にとっても得るところは大きい。

なお、逆に、日本の高校生を1週間程度中国に派遣し、中国の同年代の人たちと交流するプログラムもあり、こちらは、2011年から例年、民間の「かめのり財団」との共催で実施されている。2016年は高校生12名と教員5名が瀋陽、長春、北京で交流。高校訪問で日本語授業に参加したり、ホームステイしたり、日中の大学生交流イベントに参加するなどした。参加した日本の高校生は、短期の滞在ながら、中国の高校生のモチベーションの高さや、日本語力、将来に対する積極性に驚くなど多くの刺激を得たという。

最近、中国から訪日する人は多いが、高校生が1年間滞在して、日本の高校で高校生活を送る継続的に実施されてきた公的なプログラムは他に聞いたことがない。約1年間にわたって滞在することで、同じ釜の飯を食い、お互いを深く知る。帰国後もホストファミリーや友達、先生と交流が継続するような深い絆が生まれ、息の長い交流が続く。



お弁当を食べながら女子トーク、広島市立舟入高校にて、中央が留学生の陳傲さん



中国政府の招待でホストファミリーによる留学生の出身元高校訪問

ホストファミリーの中には、例年、留学生を受け入れている方もいる。2017年、ついに、中国側より、多年にわたり高校生受入を行ったホストファミリーに対して感謝の意を表するため、ホストファミリーが北京、天津に招待され、修了生との再会を果たすことができた。ホストファミリーは、留学生の出身元高校訪問、修了生との夕食会の他、故宮博物館、万里の長城、中国雑技団鑑賞なども楽しんだ。

また、本プログラムの修了生の4割近くが、東京大学、京都大学、慶応大学などの大学・大学院進学やSONYや日本たばこ産業、楽天、星野リゾートなどの企業へ就職のため再来日し、両国間の架け橋として活躍している。

(2) 地方公共団体等へのノウハウ提供

このような中国の高校生の留学生の受け入れプログラムについて、日中交流センターの堀事務局長は、「中国との姉妹都市や東京オリンピック・パラリンピックのホストタウンで若い人同士の交流を進めたい地方公共団体や、中国事業に関心のある企業などがあれば、累計400人近くを受け入れてきたうちのノウハウの提供ができます。受入れに係る実費を負担していただければ、(ア)中国教育部の推薦する高校生の紹介から、(イ)地元高校、ホストファミリーとのマッチング、(ウ)高校生の入国から、滞在中、出国までのケアなど入口から出口までのケアを一気通貫で提供できます。

うちのノウハウが、日中の若者交流の一つのモデルになればと願っており、現にオリンピック・パラリンピックのホストタウンとなる地方公共団体による国際交流事業に対するノウハウの提供が具体的に進んでいます。ご関心があれば是非ご連絡いただければありがたいです。留学生を受け入れたいというホストファミリーへの応募も大歓迎です。」と語る。

同センターは、元中国大使の阿南所長はもとより、堀事務局長自身も元東京三菱銀行上海支店長。中国人スタッフを含め全員が中国語に堪能な専任のチームで、長年中国関係の実務に携わってきた豊富な人脈があり、何かあれば、堀事務局長らが全国に飛んでいく。中国の教育部はもとより、必要があれば、留学生の両親や派遣元の学校とも密にコンタクトを取る。

例えば、中国の友好・姉妹都市提携先からの留学生を受け入れたいという地方公共団体からのニーズがあれば、そのような生徒をご紹介できる。留学生を受け入れると、中国の若者を通してその地域の人が相手を知ること、逆にその地域を伝えることもでき、地域の人々との息の長い交流による地域活性化にも資する。さらに、中国の若者は日本以上にSNS好きなので、その地域についての発信による観光振興にもつながる。実際、日本政府観光局（JNTO）による中国から日本への修学旅行や学校視察などの教育旅行のプロモーションに登場し、日本での学校生活について生の声として自らの経験を語った研修生もいる。

企業との関係では、本プログラムには、古くから資生堂、カシオ計算機、最近では三菱東京UFJ銀行からもご協力をいただいている。

堀事務局長によると、「日本のことをよくわかっている中国の若者をというような企業があれば、ホームステイなどして日本人とともに高校生活を送る本プログラムの修了生はまさにうってつけ。高校生なので、気の長い話ですが、そのような企業の長い目での将来を見据えたニーズがあればお声掛けいただければと思います。研修の際に企業訪問を盛り込むことも可能です。」と語る。

3 ふれあいの場

このように日本人と長期的に濃密な交流ができるのは毎年僅か30名程度。より広く多くの人にアプローチすることも必要。このため、比較的日本の情報に接する機会の少ない中国の地方都市の大学などに、青少年を主な対象とした「ふれあいの場」を開設。現在、北はハルビンから南は広州まで、13都市（ハルビン、長春、延辺、済南、西寧、南京、成都、重慶、杭州、長沙、南昌、昆明、広州。この他、西安、武漢、貴陽の3都市で準備中。）で、中国側が主催機関として、施設提供や日常の運営、企画を行い、日本側がコンテンツの提供と交流イベントの開催を支援。そこでは、雑誌、書籍、映像等で日本の最新情報に触れることができるほか、2015年度だけで約250件の様々な日中交流イベントを実施、約35,000人を動員。

伝統文化的なものでは、和服の着付け講座、寿司などの日本料理教室、夏祭り、風呂敷体験、藍染め体験、餅つき大会、おりがみ教室を実施。新しい文化関連では、吉林省延辺では日本語を学ぶ学生向けの日本語カラオケ大会を毎年開催したり、大連や長春で、カリスマ美容師や人気女性誌の読者モデルによる「東京のリアルファッション&メイク」のイベントを開催。南京で開催した「君の名は」の新海誠監督展は、中国でも大人気を博した「君の名は」のブレイク前だったが、1週間で延べ2,000名ものファンが訪れた。

日本語関係では、南昌で大学生による日本語スピーチコンテストや、杭州、済南、成都、西寧で、執事やお嬢様などの特徴的なキャラクター表現の学習やキャラクターになりきった会話練習をするといったアニメ・マンガの日本語講座を開催したこともある。

ビジネス関係では、杭州や嘉興で、丸紅元中国総代表や、星野リゾートに就職した中国高校生長期招聘事業の2期生らが登壇し、国際的に通用する人材、日本企業が求める人材、日本での就職活動、日本企業での勤務実態等の日本の企業文化を紹介するセミナーを実施したり、済南で日本のビジネスマナー講座を開催している。

このようなふれあいの場の運営を現場で担っている中国の機関の幹部や中国人学生を日本に招き、更にその活動の充実を図るべく、研修も行っている。

「ふれあいの場は、中国の若者が気軽に日本にアクセスできるプラットフォーム。中国の若者に直接アクセスしたい日本の企業や大学などがあれば、中国の大学などにあるふれあいの場を是非ご活用いただきたい。」と堀事務局長は語る。

4 日本映画上映会

映画は、普遍的な人々の姿を描き、国境を超え、人々の心を打つ。魅力ある映画の交流は両国の友好関係のさらなる醸成の一助となる。

2016年、日本映画は「君の名は。」を始め、話題のヒット作が相次ぎ、42年ぶりに1億8千万人台を回復。興行収入は過去最高の2,355億円を記録。中国の映画市場は約7,500億円と日本の約3倍、スクリーン数で12倍の規模。中国では年間約64本という外国映画の商業上映の制限枠があり、その枠をハリウッドなどの外国映画が争う。日本映画の商業上映は2015年は2作品だったが、2016年には「君の名は。」を含め11作品。

2016年9月、安倍総理と習近平国家主席の日中首脳会談では、「2017年の国交正常化45周年、更に2020年、22年の両国でのオリンピック開催を見据え、様々な分野で交流を拡充していく」ことで一致。こうした流れを踏まえ、2016年11月、官邸に設置された「映画産業の海外展開に関する検討会議」（議長：萩生田内閣官房副長官（当時））では映画を通じた国際交流の在り方について議論。また、2016年の東京国際映画祭では6本の中国映画、上海国際映画祭では50本、北京国際映画祭では22本の日本映画上映（映画祭は、有料でも商業上映ではないという位置付けのため制限枠外。）。

更なる映画交流として、2017年12月1日から3日、中国における日本映画上映会（2017中国日本心新片展）を上海、昆明、深センで初めて開催（主催：国際交流基金、公益財団法人ユニジャパン、上海国際影視節有限公司）。これまで両国



オープニング上映「美しい星」の吉田大八監督と女優 橋本愛による1300人の観客とのQ & A

の国際映画祭にお互いの国の作品は出ていたが、今回は日本映画のみの上映会。映画祭と同様、外国映画の商業上映の枠外で、新作の日本映画10本（各都市で9作品）（吉田大八監督「美しい星」、白石晃士監督「不能犯」、小林正弘監督「海辺のリア」、富永昌経監督「南瓜とマヨネーズ」、熊沢尚人監督「心が叫びたがってるんだ。」、河瀬直美監督「光」など）。2016年1年間の商業上映数並みの上映ができた。

現地を見ていないが、オープニング上映の三島由紀夫の異色のSF小説を現代に蘇らせた映画『美しい星』は、約1,300席が4分で即完とのこと。2018年公開予定のワールドプレミア上映の俳優・松坂桃李が初めてダークヒーローを演じる立証不可能犯罪のスリラー・エンターテインメントの映画『不能犯』は、半日で3都市完全完売とのこと。

逆にこの3月には、東京、大阪、名古屋で、日本における中国映画上映会（電影=Dianying-2018）を開催予定。新作を中心に10本程度の中国映画が上映見込み。

5 松竹大歌舞伎北京公演

このような地道な活動のほか、2017年3月、日中両国の国交正常化45周年の開幕を飾る事業として、北京天橋芸術中心・中劇場にて、松竹大歌舞伎が公演。歌舞伎を通じて日本文化の魅力を中国に紹介することにより、未来志向の関係構築の一助とするもの。

演目は、『義経千本桜 鳥居前』『玩辞楼十二曲の内 恋飛脚大和往来 封印切』、『藤娘』。中国での本格的な歌舞伎の公演は、10年ぶり5度目。3日間の5回公演で、約900席の380円から80円（1元約17円、歌舞伎座で観ると、演目にもよるが今月は、22,000円から4,000円）というチケットが販売開始から4日で全公演売り切れ。

これも現場を見ていないので、松竹運営のWebsite「歌舞伎美人」の解説に譲ると、幕開きは、中村 芝翫、片岡 孝太郎ほかの出演で、歌舞伎の荒事の芸を見せる『義経千本桜 鳥居前』。次に、中村 鴈治郎、中村 芝翫ほかで、上方和事の代表作の一つ、『封印切』。最後に片岡 孝太郎の『藤娘』という、歌舞伎の代表的なジャンルの名作、人気作が、豪華な配役で上演された。

『鳥居前』では「待て、待て」と、留めるおかしみのある場面で、「ダン イーシャ」と中国語でせりふを言うと、客席からは歓声が上がり、また、『封印切』の鴈治郎と芝翫との丁々発止のやりとりでは、客席から笑いも起きた。『藤娘』では暗闇から一転、孝太郎の美しい藤の精が現れると、感嘆が会場に広がったという。

日本でも門外漢だと、役者や芝居の背景などの説明をしてくれるイヤホンガイドがないと歌舞伎はよくわからないが、今回、中国語のイヤホンガイドを無料で配布したことが大きく功を奏したとのこと。

来場者アンケートによると、回答のうち、79%が女性、年齢層は多い順に、20代54%、30代

29%、40代8%、10代と60代が3%。歌舞伎を見た理由は（複数回答可）、「日本文化に興味があるから」が一番多く83%、続いて「伝統芸能に興味があるから」61%、「舞台芸術に興味があるから」55%。満足度は、4段階評価中、最も高い「とても満足」が95%、次の「まあまあ満足」は5%で、やや不満、とても不満ともにゼロという結果。また、「もっと日本の伝統文化を理解して日中友好をさらに促進したいと思った。」「とても貴重な機会だった。中日国交正常化45周年の機会を得てこのような高い水準の歌舞伎公演を鑑賞できるとは！」といった内容多数など、大変な好反応を示すアンケート結果。

その後も、在中国日本国大使館による中国版ツイッター（ウェイボー）のフォロワーから、好評のコメントが多数寄せられたという。訪日時に歌舞伎を見る人も増えるかもしれない。

6 北京日本学研究センター

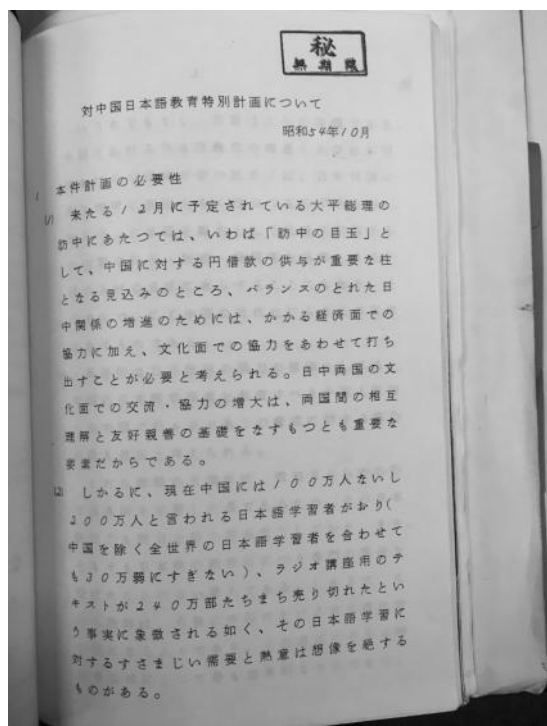
このような草の根のアプローチのほか、日本を深く理解している専門家が中国にいることも重要である。何かの時に、日本を理解しないで反応されるより、理解して反応をしてもらえる方が遥かに良い。

1972年の日中国交回復交渉で外務大臣だった大平総理が1979年に訪中。これも外交史料館で当時の資料を紐解くと、大平総理訪中の目玉は円借款が重要な柱だったが、バランスのとれた日中関係の増進のため、経済面での協力に加えて、文化面での協力を合わせて打ち出すことが必要だったとのこと。当時、中国には100万人ないし200万人と言われる日本語学習者がおり、ラジオ講座用のテキスト240万部がたちまち売り切れたという。ちなみに中国は今でも日本語学習者数は世界一で昨年ついに世界中で100万人を突破した日本語能力試験応募者約103万人のうち約27万人は中国での応募者とダントツの1位。その時の華国鋒主席との合意に基づいて、日本語研修センター（いわゆる大平学校）を1980年に設立。

その後、85年に北京日本学研究センターとなり、現在、北京外国語大学と北京大学の2か所に



『封印切』（亀屋忠兵衛：鴈治郎、丹波屋八右衛門：芝翫）
©松竹株式会社



昭和54年の大平総理訪中の際の外交史料「対中国日本語教育特別計画について」。外務省外交史料館所蔵。

ある。北京外国語大学は、アカデミックな面が強く、博士課程・修士課程の研究者を指導。これまで修士課程853人、博士課程185人を養成。本プログラムについては、例えば、中国でのビジネスとも縁が深い三菱商事から毎年ご協力をいただいている。他方、北京大学は、中国の官公庁・企業の若手幹部等を対象にした、より実務的なプログラムとして発足し、社会科学専攻の大学院生に対象を変えた今日も、その修了生は中国の官公庁、産業界、学界等で幅広く活躍している。これまで551人が受講。この北京大学のプログラムには、1990年の竹中平蔵先生、加藤寛先生以来、堀内昭義先生、吉野直行先生、吉川洋先生といった学者の方々や日本の財政・金融政策について講義するため財務省や日銀のOB、現役も教授として派遣されている。

北京日本学研究中心を含め世界中の日本の専門家を支援・育成を担当する柳澤国際交流基金研究・知的交流部長によると、「中国に限らず、研究者は学位取得のために論文を書くので、他の

人がやっていないことをテーマにします。その結果、大きなテーマには一般に先行研究があるので、次第に細分化されたテーマになっていくのはせつかくの研究成果の活用を考えると悩ましいところ。もし、中国に関係深い企業や、地域研究について地方公共団体などから特定のテーマについて資金を出すので研究してほしいというような要望があれば、研究成果が活かされる研究でもあり、大歓迎です。」とのこと。

7 おわりに

昨年、国交正常化45周年、今年、平和友好条約締結40周年を迎える日中関係にはいろいろとある。人と人との交流は迅速にも見えてすぐに効くようなものではないが、長期的には漢方薬のように効いてくるかもしれない。

このような中国関係事業、勿論、日本の文化外交の実施機関である国際交流基金の事業の重要な柱である。

主な参考文献

- ・外交青書2017、外務省
- ・国際交流基金 日中交流センター 10年のあゆみ
- ・国際交流基金 心連心：中国高校生長期招へい事業 第10期報告書
- ・国際交流基金 平成28（2016）年度年報

Website等

- ・外務省のWebsite
 - ・外交青書・白書 http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/bluebook/2017/html/chapter2_01_02.html#s2120102
- ・これまでの新日中友好21世紀委員会の活動について http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/jc_yuko21/index.html
- ・外交史料館 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/>
- ・国際交流基金のWebsite <http://www.jpif.go.jp/j/index.html>
 - ・中国高校生長期派遣事業 <http://www.chinacenter.jp/>
 - ・ふれあいの場 <http://www.chinacenter.jp/japanese/fureai/>
 - ・北京日本学研究中心 <http://www.jpif.go.jp/j/project/intel/study/support/bj/index.html>
 - ・日本映画上映会 <http://www.jpif.go.jp/j/project/culture/media/exchange/2017/10-01.html>
- ・Cinema Art OnlineのWebsite <http://cinema.u-cs.jp/event/china-japan-film-2017-op/>
- ・歌舞伎美人のWebsite <http://www.kabuki-bito.jp/>